

マーとニジのたび

奄美市立屋仁小学校 二年 宗清 将才也

「あれ、あの玉はなんだろう。」

かいがんに、ぎん色の大きな玉がおちています。マーがその玉をもちあげたしゅんかん、玉がぱかっとわれて、さかながとび出してきました。うるこの一つ一つがにじ色にひかっている、見たこともないさかなです。

「ぼくは、にじ色フィッシュのニジ。」

「ええっ。さかななのに話せるの。ぼくはマー。九さいだよ。よろしくね。」

マーはニジのことがすぐにすきになり、いつしよにあそびました。でも、ニジはだんだん元気がなくなってきました。自分の家ぞくに会いたくなかったのです。そこで、マーはニジの家ぞくをいつしよにさがしてあげることにしました。

「いったい、どこにいるんだろうね。」

マーはニジのせなかにつかまって、海のまん中まで来ていました。おなかがすいたマーとニジは、小さな島によることにしました。そこには、海ぶどうがそこらじゅうに生えていました。むちゅうでたべていると、「ハブザメだ。たべられちゃう。」

と、エラブチたちがさけびながらにげてきました。ハ

ブザメは、きばからどくを出す、海で一番きょうぼうなサメです。エラブチたちがたべられそうになったその時、ニジがまるで矢のように、ハブザメに体当たりしました。

「よくもやったな。お前からたべてやる。」

こんどは、ニジのピンチです。かくれていたマーは、ゆう気をふりしぼって、ハブザメの前にとびだしました。マーは、

「やめろ。ニジは家ぞくに会いに行くんだ。」

とさけんで、海におちていたアンボイナで、ハブザメのはなをさしました。

「ぐうっ。体がしびれる。」

ハブザメはおなかを見せて、ふうせんのようにうかんでいきました。

「ありがとう、マー。いのちのおん人だよ。」

ニジは、マーにだきつきました。エラブチたちも大よろこびです。

「ありがとう。おれいにこれをあげます。つかうと、ねがいがかないますよ。」

と、エラブチが小さなシャコ貝をくれました。

夜が近づいてきました。さがしてもさがしても、ニジの家ぞくは見つかりません。マーとニジは、ねる所をさがして、大きな島のどうくつに入りました。する

と、とつぜん、どうくつのおくにすいこまれてしまいました。そこには、ウミヘビじいさんがいました。

「ここは、クジラのはらの中じゃよ。わしも十年前にすいこまれて、出られないんじゃない。」

と、かなしそうに言いました。ポタリ。ジユウ。

「うわあ、ようふくがとけるよ。よけて。」

てんじょうからは、物をとかすえきがおちてきます。

ニジとマーは、今にもなきそうです。

「そうだ。あのシャコ貝をつかおう。」

マーはそうさげぶと、シャコ貝をあけました。すると、中から大きなシャボン玉が出てきて、みんなの体をつつみこみました。

「よし、わしのしっぽでクジラをくすぐって、しおをふかせるぞ。」

ウミヘビじいさんはそう言うと、クジラのをどをくすぐりました。すると、

「ハッ、ハッ、ハックシヨーン。」

クジラの大きなしおふきといっしょに、みんな、空高くまでとんでいきました。

「やった。外に出られたぞ。でも・・・。」

いきおいよくとびすぎて、ついには、天の川までとばされてしまいました。

「おお、ニジじゃないか。ああ、よかった。」

「わたしたちのむすこだ。生きていたのね。」

やさしい声が聞こえました。ことごとわしざから、ニジとそっくりのにじ色フィッシュユがやってきました。なんと、ニジはおりひめ星とひこ星の子どもだったのです。

「ぼくとお母さんとお父さんは、空の上にとんだね。」

「やつと会えて、うれしいよ。」

ニジは、すっかりだきあいました。

「ありがとう、マー。きみのおかげだよ。」

「よかったね、ニジ。ぼくもううれしいよ。」

ニジとマーは、ぎゅっとあくしゅをしました。

「マーくん、ウミヘビじいさん、おれいにねがいごとを一つかなえてあげるよ。」

と、ひこ星が言いました。ウミヘビじいさんは、へびざになつて空にのこることにしました。マーは少し考えて、

「じゃあ、ぼくは家にかえりたいです。」

と言いました。ひこ星はにっこりわらうと、マーに星のこなをかけました。つよいにじ色の光で、マーは気がとおくなりました。

気がつくと、マーは家のベッドの中にいました。ゆめを見ていたのかなあ。外はまんてんの星空です。ふと、七夕のささを見ると、にじ色のたんざくがかかっています。

マーはあわてて読みました。「ありがとう。また会いに来てね。ニジ。」夜空を見上げると、

天の川でにじ色の星がきらきらかがやいていました。